

塩野義、変異株対応ワクチンを開発 「来秋に間に合わせる」

10/31 産経新聞



決算について説明する塩野義製薬の手代木功社長＝31日、大阪市中央区（株式会社 産経デジタル）

塩野義製薬は31日、同社が開発した新型コロナウイルスワクチンについて、国に承認申請中の従来株対応ワクチンと並行して、変異株のオミクロン株派生型「XBB1・5」に対応したワクチンの開発を進めていることを明らかにした。流行期に入る今冬に臨床試験（治験）を実施し、「来年秋の接種に間に合わせたい」としている。

「XBB1・5」対応のワクチンは、9月下旬に始まった秋接種で採用されている。塩野義は従来株対応で承認をまず取得し、「XBB1・5」対応で追加申請を行う方針。製造設備は整っており、今後出現する新たな変異株にも対応できる供給体制を目指す。塩野義は従来株対応ワクチンを昨年11月に国に承認申請し、今年7月の厚生労働省の専門部会では「承認の可否を判断するためには情報が不足している」として、継続審議となった。国からはベトナムでのプラセボ（偽薬）を投与した場合との比較治験のデータ提供を求められている。

一方、塩野義が同日発表した令和5年9月中間連結決算では、新型コロナ飲み薬ゾコーバなどのコロナ・インフルエンザ関連製品で、国内で予想を約24%上回る444億円を売り上げた。このため売上高を示す売上収益が前年同期比52・9%増の2305億円、最終利益は58・2%増の905億円で、いずれも過去最高となった。

ゾコーバは9月まで全額公費負担だったが、10月からは自己負担が発生する。ただ、塩野義はゾコーバが市場に浸透したこと、冬の流行、来年3月末まで公費負担が一部残されたことを考慮し、下期の国内でのコロナ・インフルエンザ関連製品の売上高を従来予想の215億円から442億円まで引き上げた。

塩野義の手代木（てしろぎ）功社長は「新型コロナは後遺症が長引くなど、安心感がまだ世の中にもたらされておらず、（収益性が落ちてても）ゾコーバの供給を続けたい」と語った。（牛島要平）

